

# 京町家通信

KYOMACHIYA PRESS  
vol.105

京町家通信 第105号 2016年3月1日発行  
特定非営利活動法人 京町家再生研究会  
一般社団法人 京町家作事組  
京町家友の会  
京町家情報センター  
ホームページ<http://www.kyomachiya.net/>

## 巻頭言 ● 祇園祭会所の再生 WMF（ワールド・モニュメント財団）の修復支援事業

再びWMFによる支援事業が始まることとなった。新しい年の始めにはいつてきたのは、四条町大船鉾の会所となる町家の修復に対する支援決定の吉報だった。四条町が会所を取得されたというお話を伺ってからかれこれ半年の時間が経過したが、その間にWMFとの協議を重ね、釜座町町家、旧村西家に対して多大なご支援をいただいたフリーマン財団がご協力して下さることとなった。四条町の会所が新たに整備されることは、大船鉾の復興とともに大変喜ばしいニュースであり、その修復に関わることは大変意義深いことである。

WMFとの出会いは2008年11月に開催された京町家保全・再生のためのシンポジウムならびに日米の歴史的建造物に関わる専門家の協議にボニー・バーナム理事長（当時）がご参加下さったことから始まっている。WMFは京町家の保全についてニューヨークの本部で我々に現状説明の機会をもうけ、町家の保全に協力を申し出て下さるという前向きな対応に我々もとても力を得たことを覚えている。その後WMFのウォッチリスト（危機遺産）に2009年、2011年と続けて登録申請をし、採択されたことが、釜座町町家、旧村西家住宅につながり、今回の会所修復事業へと続いている。最初のきっかけを作って下さった立命館大学リム・ボン教授のご尽力にはこの紙面を借りて本当に心からの感謝を申し上げなければならない。リム・ボン教授のニューヨークで町家のシンポジウムを！というご提案がなければ、これまでのプロジェクトは違っていただろう。日本ではなくアメリカニューヨークという発想を私たちはそれまで持っていなかったのだから。いまでもそ当たり前のよう海外とのやり取りが取り上げられるようになったが、10年前のこのプロジェクトはとても大きなことだったと今は思っている。

ニューヨークジャパンソサエティ、京都市景観・まちづくりセンターともこのプロジェクトを通して、相互に大きな経験を重ね、新しい取組を進める力を得たことは京町家の再生に取っては画期的なことであった。

さて、今回の対象となる町家は昭和初期に建てられたものであるが、これまでの町家同様に内部は時代にあわせ、改変が重ねられている。今後、お町内、WMF、まちづくりセンター、再生研、作事組をメンバーとする検討会を経てお祭の会所の役割を持った町家として修復が進められることとなった。新町通りには船鉾、放下鉾、北観音山、八幡山と伝統的な形の会所が並ぶが、そこに新たに大船鉾の会所が仲間入りし、新町通りの会所はさらに充実することとなる。この町家

は収蔵庫としての機能も併せ持つこととなり、大船鉾の大きな部材を奥に収納する。これまでの町家とは違った機能も必要となるため、修復についてはしっかりと議論を重ねたいと考えている。研究会としては、船鉾、八幡山に続く案件であり、祇園祭の会所の成り立ち、形など今年の大きなテーマとして取り上げたいと思う。昨今、近隣の大型町家がいくつも姿を消し、町家を存続させることの大変さを痛感しているが、この取組がまちなかに大きな力を与えてくれることになること信じている。

2016年2月10日に四条町大船鉾会所においてWMFの支援決定についての記者発表があり、関係者が集まり、会見を開いた。

WMF日本代表の稲垣光彦氏より、今回の取組みについて、約28万ドルが今回の修復事業にたいして支援されるという報告があった。前述の通り、支援はWMFのパートナーであるフリーマン財団によるものであり、今回で3期目の支援である。

工事の内容については作事組末川氏より報告があり、修復工事は今年（2016年）7月の祇園祭が終わってから本格的な工事にはいることが発表された。お祭の会所としての形を踏襲して、1階の底は板葺き、道との一体感を持たせるために現在の昭和初期型は格子を外せるように改修されることとなった。2階にはお祭の神事が行われる場を作り、鉾にわたるための橋がかりがもうけられる。（これまでは道から鉾の上に上がっていた）

2017年6月には完成の見通しで、新しい会所の姿がお祭に見えることとなる。

＜小島 富佐江（京町家再生研究会 理事長）＞



記者発表当日の様子



## 論考◎ アジアヘリテイジネットワーク・バリ会議に参加して

1月の8日から11日まで、奈良まちづくりセンターとインドネシアヘリテイジトラストが国際交流基金の支援を受け表記のシンポジウムを開催された。京町家再生研の小島理事長、宗田副理事長とともに参加する機会を頂いた。「アジアの途上国における歴史的都市環境保全の支援」についての意見交換を目指して、アジアを中心に13カ国からの出席があった。30分程度、京都からの発表の場を頂けた。その報告をさせて頂く。

事前に受け取った概要では「インドネシア、ミャンマー、カンボジアなど途上国での都市空間の保存を議論」。主な論点は、

- ①他国の市民活動団体はどうしたらそれをサポートできるか？
- ②市民参加の仕組みを都市空間保全のプロセスにどのように確立できるか？
- ③経済活動と調和を持った都市空間保全の仕組みをどのように得られるのか？

というものだった。京町家再生研のこれまでの活動、自身が取り組んでいる日々の町家改修、第5期を迎えた京町家棟梁塾の活動の報告と合わせてそれらの設問に応じるプレゼンを試みた。

①他国の市民活動団体はどうしたらそれをサポートできるか？

この問い掛けには、京町家再生研の24年間の活動成果をそのまま伝えることが、間接的な回答になると願った。第一は町家の再評価を社会的に行ったこと。都市の生活文化の受け皿である町家の良さを市民に気づかせたこと。町家の再生の事例報告、再生された町家でのアートイベント、改修中の町家の見学会、町家の住人による発表会など、小さな取り組みを続ける大切さを訴えた。少なくとも今日では京都の景観に町家は不可欠なものとなり、町家を再生して住み続けることは社会的な選択肢として一般化した成果。第二は京町家作事組の創設と伝統構法の復権、17年間で300件近くの町家の改修を行った実績を報告。第三は京町家情報センターの創設。不動産業者の意識改革から取り組みを始め、今では年間に200件の町家を仲介している実績の報告。

②市民参加の仕組みを都市空間保全のプロセスにどのように確立できるか？

ここでも京都での状況を冷静に伝えることに務めた。京町家は私有財産であり、そもそも、その保全・再生は民間のプロジェクトであること。また国の建築基準法は町家を含む伝統工法の存在を60年間無視し、その新築の道を閉ざしている状況。所有は個人でも、町家の存在は社会的に分ること。その所有者や住人のところに向いて、その保全と再生、町家の将来性を説得出来ること。これ以外に町家の保全の道はないこと。これがおそらく市民活動そのものであること。5万軒の町家のすべてにアクセスすることは不可能でも、成功例が近隣に広がり、施主が次の施主に繋がる事例。京町家作事

組での運営協力金の仕組み。京町家ネットの活動資金を得ると同時に、改修工事を行う個別の施主に、市民活動への参加を実感してもらう目的を伝えた。行政も町家保全の市民活動を無視できないこと。景観条例の中で地区指定、単体指定で町家保全への助成が進み、今日では空き家活用や耐震改修からも助成が出来たこと。第二の設問への京都での答えは、市民団体はとにかく活動するしかない、そして意思表示を続けていくしかないと伝えた。

③経済活動と調和を持った都市空間保全の仕組みをどのように得られるのか？

宗田先生のアドバイスにより、やや楽観的で世界史的な考察を行った。世界的に見れば、経済の動きは200年前の産業革命始まり、その直後にアーツアンドクラフト運動が始まり、日本でも民芸運動が起こったこと。20年前に始まったIT革命の後、反作用としてスローライフやオーガニックライフを目指す動きが世界に広まったこと。京都でも30年前のバブル経済期には夥しい数の町家が失われたが、今では年間5千万人の観光客が訪れていること。国内からではグローバル化が進む東京地域からの観光客に受けること。グローバリズムの後には必ず、ローカリズムが起こること。時間的なずれはあり、貴重なストックも失われるが、保存の重要性を唱え続けていれば必ず開発に対する反作用が生まれる。第三の設問でも保全の実践に取り組むしか道はないと訴えた。

最後に京町家棟梁塾の取組みを加えた。ここでも宗田先生からの確かな示唆を頂けた。棟梁塾の目標として若い職方に伝統構法を伝えることは自明だが、それは当面の町家の保全のためばかりではない。伝統技術をアートに高めること、職人をアーティストに育てる大きな狙いがあること。伝統的な職方に憧れる若い世代が、自立的なアーティストとして、町家の施主や住人にスローライフやオーガニックライフを語れること。それが実現していること。ホワイトカラーでもなくブルーカラーでもなく、クリエイティブクラスの育成を目指していること。伝統構法を守る若いクリエイティブクラスが京都にいて伝統そのものの復興も目指せること。将来、時代の要求が変われば伝統的な町家を京都に新築できる技術が残せること。立派な町家が壊されても悲観だけしてはだめで、いつかそれ以上の町家を新築できる技術とクリエイティブクラスを残す大切さ。一昨年150年ぶりに復興した祇園祭の大船鉦では、地域の若い世代が中心を担った。その組立てや解体を担うのは京町家棟梁塾の卒業生であり、同様に京都で町家の復興できる日への希望でプレゼンを括った。

バリ会議の全体の中で、技術者の発表は自分だけ、やや異色であったと思う。しかし、交流の種はすこし蒔けたよう、香港の参加者からこの4月に京都を訪ねたいと連絡があった。実際の町家保全の取組みをアジア各地にすこしずつでも広められればと思う。

＜末川 協 （京町家再生研究会 幹事）＞



## 京町家再生の試み ◎空き家が生きかえるとき 下京の長屋 改修現場見学会

1月例会は、構造改修が進んでいる長屋の見学会をおこないました。回り路地に5軒の長屋が連なっている現場です。寒いなか、4会合同でおこなった見学会には42名ものみなさんが集まりました。

一年ほど前、大家さんから相談があったときは、隣接する裏側のマンション計画もあり、この場所をどうしようかと迷っておられたようです。特にこだわりはないものの、価値があるならば再生してみてもよい、ということでした。再生研や作事組のメンバーが一軒ずつ拝見させていただくと、長く空いたままになっているところもあり、少々荒れていましたが、昭和初期のモダンな感じがところどころに見受けられます。5軒それぞれのデザインが少しずつ違っているなど、当時の大工さんのこだわりも感じられました。きちんと改修すれば、再び借家として魅力的な町家になることを大家さんにはお伝えしました。

実際の改修に踏み出すまでには少し時間がかかりました。情報センターのメンバーも交えて空き家対策に本格的に乗り出した京都市担当課との勉強会を開いて、大家さんと一緒に学びました。町家改修の基本的な考え方はもちろん、条例の基本、さまざまな助成など情報を共有していきました。大きなきっかけは、友の会メンバーでもあるSDCコンペの設計課題として、この長屋の改修を設定したことでしょうか。学生さんが現場を見て、大家さんに話を聞き、いろいろなアイデアを出しました。最終プレゼンも、大家さんと一緒に再生研、作事組のメンバーが伺いました。このコンペ案のプロジェクト名の一つを大家さんが気に入られたようで、見学会の当日には、「ようこそあけびわろージへ」と看板にして出迎えてくださいました。学生さんのさまざまな案やいきいきしたところが大家さんを勇気づけたのかもしれません。コンペに参加した学生さんもこの日はたくさん参加してくださいました。構造改修の現場を間近に見ながら、大工さんに質問し、若い人たちが学ぶ機会にもなりました。大家さんがそんなひとりひとりにみかんを配ってくださったのも印象的でした。

計画中に唯一住んでおられた方も引っ越しされ、すべて空

き家となった5軒を一体で改修することになりました。再生研でも作事組でも長屋一体を改修するのはほぼ初めての事例です。壁一枚で隔てられている家々がところどころあけあけになっているなど、日常では見ることのできない改修現場でした。長屋であっても、構造改修としては大がかりなものになっています。長屋を一軒だけ直す際、隣との関係が難しいところが多々あるようですが、今回はしっかりした構造改修ができ、安心な住まいとして再生されていることがよくわかります。

長らく空き家になっているところ、しかも数軒まとめて、となると、一度に再生へと踏み出すには、大きな力が必要です。さまざまな不安を抱える大家さんによりそいながら、私たちも多くの町家所有者が抱える現実や、金融機関をはじめとする社会の受入体制など、ともに学びました。こうして多くの人たちが関わっていることそのものが、大家さんの気持ちを支えているのかもしれない。特に若い人たちが関わってくださると、今後の町家の行く末に希望が持てるのではないのでしょうか。大家さんが新しい一步を踏み出せるように私たちができることは何か、大家さんと一緒に歩みながら町家再生を続けていく必要があることを痛感しました。

こうして5軒の町家が住まいとして息を吹き返しつつあります。この長屋の再生の経過はこれからもこの通信で紹介していくことになるでしょう。今回は物語のはじまりに過ぎません。現在、3軒の長屋で契約が進みつつあります。ご自身の好みで設計変更がおこなわれているところもあります。学生さんであればシェアも可能なので、ご興味にある方はお気軽にご相談ください。

なお、見学会当日はその後、近くのギャラリーカフェに議論の場を移し、暖かい飲み物をいただきながら、のんびりえんえんと話が続けました。若い人たちの参加も多く、これからの再生活動に明るい兆しを感じた次第です。

<丹羽 結花（京町家再生研究会）>



見学会



カフェにて討論

## 歳時記 ● 町家のとおりにわ

町家のとおりにわは段差があり、寒くて便利の悪いところといわれ、多くの家が床をはり、天井をつけてあたたかい「東京式だいどこ」に改修されました。でも、最近またとおりにわのよさを見直し、お家を直される時はとおりにわを復元されるところも出てきています。表から奥までつづく土間。1本の通り土間は、店の間、玄関、はしりと平行する部屋の用途に添うように使い方が変化します。とても機能的で、プライベートでありながら、人の出入りが当たり前の場として便利な空間です。家の内側であるのに、気温は外気とかわらず、天井が高く風がよく通るぶん体感には外気より少し低く感じるように思うのは、寒がりだからでしょうか。夏はその分ひんやりとしていて、町家ならではのといったところですが。

かつては「おくどさん」での煮炊きの火があったため、冬はそれほど冷たくなかったと聞きますが、残念ながら「おくどさん」を取払いガスコンロにしたため、ほんのりとあたたかい空気は失せてしまっています。そのかわりに冷蔵庫は不要なぐらい、野菜をはしりに置いておいても冬の間は傷むことはありません。よっぽど寒いときにははしりにため置いた水が凍ることもありますが、最近は暖冬のせいかそこまでの寒さはまれなことになりました。

とおりにわは季節の風を常と感じるところです。お家によっても違いますが、天窓があり、光も差し込みます。この光が季節によって変わります。これからは春に向かって弱々しかった日差しが日に日に明るくなり、ダイドコまで差し込むようになると春も本番です。

お日さんの光はとてもあたたかで、ありがたいことがよくわかるのがとおりにわです。こごえていた土間に光が差し込み、じわじわとあたりがゆるみだします。食事の支度をしていても、2月と3月では大違い、足元の冷たさが和らいでいるのがよくわかります。

とおりにわの便利さは「はしり」の役割が大きく、土間の使い方は本当に良く出来ていると感心します。特に近郊

から届くお野菜の扱いはこの「はしり」がしっかりと役割をはたしてくれます。ひとかかえもあるような大きな水菜、土のついたおねぎ、大根など根菜類、お家のなかでは処理が大変ですが、土間ならバラバラと落ちる土は後で水を流せばすっきりきれいになるので、汚れることを気にせず処理することができます。年末のお煮しめやカブラの切り漬、お鍋のための水菜やおねぎの準備はらくちんです。

表通りから戸をあけて入ると店の間があり、そこを通り抜けて玄関にこられるのが普通のお客様ですが、かつて知ったところとばかりに奥までずっと「侵入」できるのが、ご用聞きさんと職人さんです。残念ながらご用聞きさんは近年これなくなり、職人さんのみがとおりにわをフリーパスで通行できる人たちです。ただ、最近は場の感覚が違うため突然奥まで入ってこられる来客もあり、こちららもびっくりしてしまうことがよくあります。のれんの奥はプライベートな場という決まり事ですが、今は通用しなくなりました。

冬の「はしり」は根菜類が中心、里芋、海老芋や丸大根、かぶら、金時人参等、体が温まると言われています。千本菜とも呼ばれる水菜や白菜、冬のおねぎも甘くておいしいものです。春の光が差し込むと、ふきのとうやせり、うどんなど山の香りが届きます。

京都のおひなさんは旧暦、4月3日ですが、おひなさんのお膳にも春の食材を使います。赤貝とわけぎのてっぱい（ぬた）やみじみを甘辛く炊いたもの、おひたしは菜の花、桃の花も露地ものがでできます。おひなさんのお菓子、ひちぎりが届くのもとおりにわ。のれんをくぐって、おまんやさんがきてくれはります。

春のとおりにわは明るく、気持ちのいい場所になります。「はしり」に立つのも苦にならず、たけのこを大きなお鍋でゆがくのも「年中行事」の一つです。

＜小島 富佐江（京町家友の会 事務局）＞



通り庭



おひなさま



## 活動報告 ● 4 会合同新年会

久しぶりに京町家再生研究会、京町家友の会、京町家作事組、京町家情報センターの4会合同新年会をおこないました。ゲストスピーカーにデービッド・アトキンソンさんを予定しておりましたが、おとうさまが亡くなられて英国へ戻られ、キャンセルとなり、お話が叶いませんでした。楽しみにしていたみなさんには本当に申し訳ありませんでした。アトキンソンさんが落ち着かれたら企画いたしますので、しばらくお待ちください。

メインイベントがなくなったにもかかわらず、飛び入りも含めて予定通りお集まりいただき、にぎやかな会合となりました。本当にお越しくださり、ありがとうございます。

急遽企画した近況報告会ですが、このところ、新しいプロジェクトが目白押し、話題提供には事欠きませんでした。

その1 「京町家の流通促進による保全・再生策に関する要望書」を2015年12月、京都市長に提出しました。京町家情報センターが中心となり、4会と京都府宅建業協会とともに作成したもので、町家を壊す前に京都市に通知することを義務づけるものです。詳しくは京町家通信104号、宗田先生の論考をご覧ください。

その2 ワールド・モニュメント財団の支援が決まり、四条町町家が改修の運びとなります。大船鉦の設計監理を担当したり、作事方を京町家作事組の若手大工、辻勇治さんが担当したりなど、これまでもいろいろな関わりがあったのですが、いよいよ祇園祭の会所として再生されます。詳しくは1ページの巻頭言をご覧ください。

その3 国際交流基金の支援により、インドネシアのバリで「アジアヘリテイジネットワーク・バリ会議」に参加、アジアの木造建築について議論しました。ここでは、大船鉦の設計にも関わった末川協さんが大活躍、英語でプレゼンしてきたことを報告いたしました。その様子は2ページの論考をご参照ください。プータンで設計活動もされていた末川さん、アジアの水があったようで、とても元気に過ごしたそうです。3月には引き続き支援を受け、タイ、マレーシアでの交流に参加する予定です。再生研も国際的になってまいりました。

その4 長屋の改修プロジェクトが始まりました。現場見学会の様子を3ページで紹介していますので、ご覧ください。新年会当日は設計担当の一人である内田康博さんがいきさつと入居者募集の案内をいたしました。

その5 埼玉県川越市で2月6日、7日に開かれる第6回全国町家再生交流会の案内がおこなれました。はじめて京都でおこなわれたのは2005年6月、もう10年も前のことですが、このときは続けるつもりがなく「第一回」とは

なっていませんでした。第二回を2007年12月に再び京都でおこない、以後、金沢市、橿原市今井町、大分県臼杵市と各地で開催されてきました。今回は初めて関東地区での開催です。京町家作事組理事長でもある木下龍一さんが2014年に川越で開かれた都市景観シンポジウムに参加するなど、交流を深め、今回も作事組をはじめ、多くのメンバーが参加しました。情報センターの城幸央さんがその様子を8ページに少し紹介していますが、こちらについては次号で詳しく紹介する予定です。

報告会の後は、長年の会員、二条陣屋の小川平太郎氏の御発声で乾杯。あちらこちらで楽しい会話が繰り広げられました。

このところ会合をよく開催するレストラン菊水ですが、こちらは大正5年、1916年創業され、今年100年を迎えました。近代に再建された町家を見守りながら老舗として生き続けているモダンなビルディング。京都で育った方々にとっては、幼い頃、お洒落な洋食をいただいたお店としても思い出深い場所のようです。今回は往年の面影が残っている3階を借りることができなかったのですが、会場が気になって参加された方もおられました。

24年目を迎える再生研ですが、当初の会員はもちろん、若い人たちも少しずつ増えています。この日も棟梁塾で学び始めた設計の方、四条町の町家プロジェクトを記録してくれる方など、新しい方々をお迎えしました。退職後、京都に住み、町家に住み始めた方も入会されています。個性豊かな面々が楽しく、時には期待を込めて厳しい議論もおこないながら、和やかなひとときを過ごしました。

締めは元作事組事務局長田中昇さんをお願いしました。無事さまざまなプロジェクトが動きますよう、本年もみなさまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

### 実施概要

日時 平成28年1月29日（金）16時30分～19時  
場所 レストラン菊水

＜丹羽 結花（京町家友の会）＞



新年会の様子

## 改修事例 ● 連棟町家の改修：「市川屋珈琲」

東山区

設計：アトリエRYO／施工：大下工務店

東山、五条通りの南に音羽越えの渋谷街道がつづれ折りに京の町へ降りた所がある。東大路馬町の交差点を西に渡り、次の角は鐘鋳町である。町名録を見ると、「大仏殿巨鐘鑄造炉鍛場ノ跡ナリ」とあり、この辺りは昔、音羽川の谷を利用して釜座の人達が、方広寺に残る大鐘を鑄たのであろうか？旧街道はこの辻で南北通りと交わる127°の広角をなし、その北東角に対象の町家は建っている。低い2連棟の厨子2階建てで、変則片入母屋屋根に2階西にムシコ窓、南側にガラス窓を切り、極鼻のたれた西に傾いた状態で佇んでいた。小屋裏の御札入れの墨書から「文化三歳(1806年)」に建てられたとされる1列3室型の約210歳になる古家である。

この連棟町家は、隣は床屋に借家貸しし、裏に陶芸工房を持つ、店舗兼用住宅であったが、最大の特徴はその平面の形である。東側の間口2間半奥行き5間の居室部の西側は、トオリニワが道の角度に並行して造られた為、ハシリニワの入口が1間巾が奥で倍程に拡がり、不思議な五角形を形成している。にもかかわらず、火袋を見上げると側緊梁と丑梁が十字に交差し、見事な準棟簷幕（じゅんとうさんぺき）の小屋組が見られる。柱と束を縦横に貫く細い通り貫が直角ではない変則角で緊張感のみなざる架構を実現している。今まで作事組が改修した200棟を超える町家にはなかったユニークな町家である。以前は陶芸の窯場として利用されたと思われるトオリニワには、湧水のある井戸があり、大きく開放された天窓からは陽光がまぶしくふりそそいでいた。

### ● 施主の要望

町家改修の目的は、それまで陶芸家の孫にあたる施主夫妻が、1階だけに住居専用で住んでいたが町家改修にあたり、住居部分を2階に移し、1階を喫茶店に改装する事であった。「未だ空き家状態の床屋をしていた隣家はそのままにして、2連長屋の状態で雨漏り、傾き等傷みが激しい基礎的な部分を強くして住み易くして貰いたい」というのが、リクエストの内容であった。施主は某有名珈琲屋に勤める素晴らしい珈琲豆を煎る技術の持ち主である。打合せの時に工房で煎った豆を挽いて入れたくれた一杯の珈琲の味が素敵であった。その施主は、「カウンター席を一番大切な所にゆったりと作って欲しい」と要望された。

### ● 設計のポイント

通りからミセ、ダイドコ、オクノ間があり、そのさらに向う奥にはハナレの陶工房が存在した。前栽があったと思われ



既存外観



カウンター

る場所に工房の増築がされていて、オクノ間の縁側の先は、昼間から薄暗く空気がよどんでいた。昭和32年に増築確認申請がされていたが、その確認後に更に増床した為に、明るさが失われていた部分を、確認申請された登記簿面積に合わせて減築する事にした。そうしてオクノ間6帖を中心に厨房とカウンター席を作り、東の床の間、棚を背に、東南側をL型にカウンター席とした。主人は厨房内から表の客席を通して、店や通りを見ながらコーヒーを入れ接客をする。こうすると、南の通りの景観が店内に道行くパノラマを提供する事となり、店先のカウンターや中央の大卓席の景色も、店内に賑わいをもたらせる事となる。設計のポイントは、L型のコーナーを曲面に丸めた2枚の杉板である。限られた予算の中で、棟梁の天下尚平氏がわざわざ岐阜の材木市に出向き求めてきたものだ。巾60cm 長さ2m 厚6.5cmの2枚の厚板をうづくりにして、角を丸めて愛情を込めて組み立てた。そして縁側には、透明の古ガラス入りの框戸を通して、昔の前栽を再現した。小庭のメニューは、既存つくばいを再利用して、2種のモミジを立体的に植え、吉祥草と苔、ツワブキを添えた品のあるものに仕上がった。

### ● 町家の味わい

施主のこだわりだった自家焙煎珈琲の味は素晴らしい成果があった。施主の御家族や知人達のやいたコーヒーカップとのコラボレーションの味わいもそれに加わる。この町家が古い陶芸工房の町並みから生まれた場所に根ざしている如く、店先の焼き物や展示物と共鳴する様な独特な店の雰囲気が開店した当初から、家に宿っている様に思われる。

店主は場所に例えた3種のブレンドを自家製作し、客にふるまっている。どうか近隣の陶芸に携わる人々の憩いの場所として、末長く賑わって貰いたいものである。最後にトオリニワのタタキのワークショップに参加して貰った皆様に御礼申し上げます。

＜木下 龍一（京町家作事組理事長）＞



前栽

施工外観





## 作事組の職人さん その31 ● ガス工事（尾崎ガス住宅設備株式会社）

昨年作事組に入会され、ガス工事を担当していただいている尾崎ガス住宅設備の代表取締役・尾崎明さんにお話しをお伺いしました。

### ●家業について教えてください

昭和3年5月に、兵庫県の浜坂から京都へ出た祖父が、個人で木製の風呂の製造販売を始めました。木曽から檜（ひのき）や榎（さわら）や榎（まき）の原木を仕入れ、帯鋸で加工して。当時は木製かタイルのお風呂しかありませんでしたが、そのうちにポリ風呂が出てきて、木の風呂は衰退しました。一時ポリ風呂も作ったようですが、そのうちに製造の仕事からは離れ、大阪ガスの傘下に入り風呂ショップとなり、公団の家などに風呂を販売・設置する仕事をしていました。昭和25年3月18日に法人化し、尾崎桶木槽工業株式会社となりました。そして昭和55年5月には現在の尾崎ガス住宅設備となりました。

その間、祖父から父、父から兄に代替わりし、昨年10月には私が兄から会社を引き継ぎました。私ははじめ家業とはまったく関係なく証券会社に就職しましたが、入社2年目に祖父が亡くなり、後を継いだ父から会社に入らないかと誘われました。思うところもあり、つとめていた証券会社をやめて入社しました。

### ●どのようにガス工事の仕事をおぼえていかれたのですか

ガス工事やガス器具については大阪ガスの研修施設に行き、資格を取ればできるようになります。いくつかコースがあり、私は営業畑なので設計、販売コースへ行きました。

### ●ガス工事で気を使うところ

建物の全面解体の場合ガスを側溝付近で切断する工事は大阪ガスに連絡しガスを止めてもらうのですが、リフォーム工事の場合ガスメータの移設等でガスを止められない場合一番気を使います。生ガスが噴出ないようにバッグをかぶせる等の手順が必要となってきます。また、圧力計算をして許容圧力損失のなかで工事が出来ない場合はガス管のサイズアップが必要となり場合によっては供給管からの引き替えが必要になってきます。

ガス屋は解体現場を見に行くことから始まり、仕上げのガス器具設置から開栓まで、工事期間全体をとおして工事にかかわっていくことが多いです。工務店さんによって、監督さんによっても建築行程が違いますから、自分なりにどのタイミングで入れれば良いかを現場ごとに意識して動いています。

### ●町家改修では

古い設備ではガスコックが回らなかったり、鉄管が腐食していたりといったことがあります。工事前に圧力テストをして問題がある場合、大阪ガスの指令室に連絡し、どこが漏れているかその箇所を検知してもらいます。ガス管が腐食等で漏れいしていれば上流から引換えます。いまの地中配管はポリエチレン配管になっていて耐久性があります。

### ●ガス工事以外の仕事と電力自由化について

温水を利用した床暖房、暖房乾燥機、住宅設備機器全般を取り扱っています。工務店さんへの卸です。床暖房にも電気式とガスがありますが、ガスの方があたたまりが早いし、低温やけどをしにくいという利点があります。

2016年4月から電力自由化が本格化して、通信とセットで電気を売る業者があるように、大阪ガスもガスとセットで電気を売るようになると、ガスがよいとばかり言わなくなるでしょうね。いま電力申込みの新しい書類がどっさり届いていて、対応に追われているところですが、新築の場合、関西では関電と大阪ガスのどちらかを選ぶ作業が増えるでしょう。

CO<sub>2</sub>の排出量を考えれば火力発電は天然ガスでも排出されます。風力や太陽光も不安定な現状では、原発を動かさざるをえないと思う。中国の海洋進出。シーレーンの不安を考えると最先端の日本の技術力を駆使し安全性をさらに高め原発を動かした方がよいと個人的には思います。日本の技術力を信じたいです。

### ●仕事の要諦

一日の半分くらいは現場と営業の外回りです。大まかにいうと、物を売ること、施工すること、そして経理業務の3つが必要ですが、このなかでひとつ得意分野をもち、あとの二つもおろそかにしないことが大切だと思います。

また、お客様のことを考えるというのではだめで、お客様の立場にたってお客様の目線で見ないと選んでもらえない。できるだけ建築屋さんの立場に立って考えながら仕事をするよう心がけています。

休日は本も読みたいです。何かが足りなくて失敗したとして、その何かが読もうとして読まなかった本に書かれていたりするものです。いい本は何度も読まないといけませんね。

\*\*\*

実直なお人柄で、頼まれたら他の人の分まで引き受けてしまうような大変良心的な方ではないかなと思いました。

聞き手（作事組事務局 森珠恵）



会社メモ：

尾崎ガス住宅設備株式会社  
京都市伏見区上神泉苑町810

## interview — 京町家に移り住んで ● 京町家シェアハウス

京都市左京区北白川。五山の送り火の「大文字」が”ドドンッ！”と麓から望めるエリアに、京町家を改装してできたシェアハウス「大文字セブン」があります。今回は千葉県から就職で京都に移り住み、シェアハウスオープン当初から住んでいらっしゃるY様に町家での生活をお伺いしてきました。

聞き手：水口貴之

(株式会社CONTEMPORARY COCOON ROOM 702)

●Yさんが京都に来ることになった理由を教えてください。

私はもともとランドスケープや建築に興味があり、また姉も同じところに通っていたこともあり、大学四年間を千葉県で過ごしました。建物だけではなく、景観をデザインすることも重要だと思い園芸学部で造園を勉強していました。そして就職をするタイミングになり、全国で候補を探していたのですが、やはり造園の”本場”といたら京都だ！と思って、京都で就職先を探していたところ、縁あって京都市左京区にある造園会社で働くことが決まったので移り住むことになりました。

●町家に住まれるきっかけを教えてください。

大学時代は普通の1ルームに住んでいたのですが、いろんな方と一緒に生活することにも興味があったのでシェアハウスを検討したところ、あるサイトでこの”大文字セブン”に出会いました。複数の物件を見て回る予定だったのですが、一番最初に見たこの建物の雰囲気が気に入ってしまって、”せっかく京都に住むなら木造建築の町家で、京都っぽい暮らしもいい！”っと思ひ、その後も他の物件も見回ったのですが、ここに住もうと心では思っていました。

●実際に住んでみていかがですか？

とても気に入ってます。まず、賃貸でこんなに広くてゆったりした雰囲気のある一軒家に住むなんてできないですね。古い建具とか部品もそのまま使われているので、そういうのを見て可愛い！と思っています。玄関や土間廊下、古いタイルの洗面台とかもあり、町家でしか味わえない雰囲気があります。また、町家に住む時に一番水周りが気になるのですが、この家は全部新しくなっているので、昔の雰囲気はそのままに便利ところは便利にと”いいとこ取り”しています。この家は縁側もあって、過ごしやすい季節は、ぽーっと庭を眺めたりできてお気に入りの場所です。

周辺環境というと、住宅街の中にあるので、近所の方の室内の話し声がたまに聞こえてくるくらいものすごく静かです。たまに近所で何か催しをやっているとその音もよくわかるので、シェアハウスのみんなで近所の地蔵盆に参加させてもらったり、近くの北白川天満宮のお祭りを見に行ったりしました。小さな地域ごとでいろんな催しがあるのも、京都っぽいなぁと思っています。

●では、ここはちょっとな、というところはありますか？(笑)

冬は寒いです！ここはシェアハウスで、ガスストーブを使えないので特にそうだと思います。冬場はいつもエアコンにお世話になっています。夏は、家の両側の窓を開ければ風は通るのですが、でもやっぱり暑いですね(笑)。それでも最近はこの

う”季節ごとの変化を感じながら住む”というのもできないのでいいなと思っています。

●では、シェアハウス、という暮らし方についてはいかがですか？

それぞれのシェアハウスごとに特色はあるのだと思いますが、この”大文字セブン”というところは、ゆったりゆったりのシェアハウスです。何か入居者イベントを定期的に活発にやっているわけでもないので、本当にみんな自然体で”住んでいる”感覚ですね。何気なく居間で一緒になるとみんなでご飯を作ったりする、そんな気軽な関係です。でも家族や友達と住むのとは違って、お互いに決めたルールに則って生活するので、やっぱりちゃんとしているので大きなトラブルとかはないですね。元々一人暮らしをしていた時、すごく寂しかったので、私にはとてもフィットした暮らし方です！

今回は、一つの大きな町家を7人でシェアして住む、という暮らし方をお伺いしました。住んでいる方の日々の手入れと管理会社の清掃とで、室内はどこもとても綺麗でした。“住む”ことで”保全する”、これからもこのような活用が増えていってほしいと思います。



### ●事務局覚え書き

2月6・7日と埼玉県川越市にて行われた第6回全国町家再生交流会に参加してきました。各地域で残る町家を守ろうと活動をされている皆様の活動報告や意見交換会。各地域によって、様々な手法・対応で町家・町並みを守る努力をなされています。核となる人・組織がやはり必要で、地道に持続させることが大切なんだと思いました。川越の蔵造りの町家のまち歩きでも、本当に川越のことが好きなんだという方にマニアックなところまで案内していただきましたが、こういう方がいて熱心に訴え続けることで、その町の人の心も少しずつ変わってきたんだと改めて感じ取る良い機会となりました。

京町家情報センター事務局 城幸央

オーナー登録数：延219

ユーザー登録数：延1455

物件登録数：延1498

成約件数：延196 (2015年2月10日現在)